

東日本大震災 学童保育の一日も早い復旧・復興を願って⑤

放射線から子どもを守りたい！

福島市学童クラブ連絡協議会・幹事
渡利学童保育きりん教室 指導員

阿部 澄

二〇一一年三月十一日の震災は、福島市にも大きな被害をもたらしました。

幸い、市内の学童保育施設では崩壊などの大きな物的被害はなく、私が勤務する「渡利学童保育きりん教室」（以下、「きりん教室」）も蛍光灯が落下した程度で、大きな物的被害や子どもたち・指導員の人的被害はありませんでした。市内では、屋根瓦の改修や崩れた道路の補修は遅れているものの、目に見える地震の被害は、いずれは改善されると思います。

しかし、あれから半年が過ぎようとしていますが、目に見えず、子どもたち・保護者・指導員、市民を苦しめて

いるのが原発事故による放射線への不安です。

原発から約六〇キロメートルの北西に位置する福島市では、原発事故直後、断水・停電などがありました。帽子やマスクは着用していたものの、子どもたちを含めて、給水車やスーパリーの前に長蛇の列を作っていました。当初、行政からは「原発事故による放射線は心配ない」としか発表されませんでした。そんな中で、放射能が降っていたであろう時期に長時間、少なくない子どもたちが屋外で「並んで」いたのです。当時はふり返って、「なぜ、あの時、子どもたちを外に並ばせてしまっ

たのだろう。なぜ、放射能が降っている、危険だとわからなかったのか……」と、子どもと一緒に並んだ保護者が話していました。「子どもに大量の放射線を浴びさせてしまったのではないか」という、自らを責めるような痛々しい後悔です。

福島市内には五、二か所の学童保育（すべて委託）があります。震災後、少なくない学童保育は春休みの一定期間、閉鎖しており、「きりん教室」のように翌日から開所していた学童保育は少数でした。小学校はそのまま春休みに入り、市から、「学童保育を開所してほしい」旨の通知が届きました。

余震と放射能の不安から、県内外に避難した子どもたちも相当数いましたが、どうしても保育が必要な子どもたちのために市内の学童保育所は、断水・停電・指導員の通勤手段として欠かさないガソリン不足の中、必死で開所してきました。開所しても、子どもたち

は放射線量の比較的低い室内での生活を余儀なくされました。それは、多くの学童保育で今日まで続いています。

四月、新年度の始まりと合わせ、各学童保育には県外に転校した子どもも見られましたが、多くの子どもたちは今までの小学校で進級しました。しかし時が経つにつれて、「放射線量が高いこと」がさまざまな形で保護者たちの大きな不安になりました。

「きりん教室」の子どもが通う渡利小学校は、マスコミでも何度も取りあげられました。保護者たちは、その報道を見た子どもたちの祖父母・親戚・友人、さらには職場の同僚などから、「渡利地域で子育てしているのか」「子どもだけでも避難させたら」と何度も言われています。保護者の中には、「あそこの子は転校するぞうだ」と噂が広がり、「行政がやらないから自分たちで除染しよう」と独自の動きを始めたたり、「考えても、悩んでもしょう

がない」という、半ばあきらめとともされるような、複雑な思いが交錯するようになりました。

「放射能学習会」が、さまざまな立場から開かれてきましたが、すべてに参加しても結局は、「放射能被害があるのかないのかわからない」「どの話を信じたらよいか」と、ますます保護者の不安と混乱は広がりました。

福島市は、そうした不安に対して、小学校や保育園には線量計を配布し、敷地内の表土改善、建物の除染などを実施しました。渡利小学校は、六月には放射線量が大きく減りました。しかし学童保育については、「補助（全額）は出すので、表土改善は各学童保育で業者と契約してやってほしい」とし、線量計も、五、二の学童保育に対してわずか二個。「子どもたちが普段、生活し、遊んでいる空き地なども、学童保育の敷地でなくても表土改善してほしい」という要望については、「やるな

らば、各学童保育で地主と相談し、自前で実施してください」という回答に終始しました。

夏休みが昨年よりも一週間延びた今年。「きりん教室」は室内でも一マイクローシールドに近い放射線量を計測します。「ここで子どもたちを一日保育することはできない」と保護者会が立ち上がり、市役所や渡利小学校と何度も交渉してくれ、なんとか夏休みの間だけは小学校敷地内の図工室を借りることができました。しかし九月からは、敷地内を八月末に表土改善した元の施設に戻ります。室内は若干、線量は下がったものの、すべての保護者が安心して子どもを預けられるかというと、残念ながらそういふ施設ではありません。

夏休み中、「子どもたちは少しでも放射線量の少ない地域へ」と、行政や民間が企画するさまざまなキャンプに参加したり、県内外に賃貸住宅を借り、親子バラバラに生活する家族もたくさん

んいしました。子どもが自ら希望して親から離れて生活するのであれば、親子ともストレスはないでしょうが、子どもが望まないバラバラの生活には、親子共々、ストレスを強く感じます。「子どもだけでも遠くに……」と書いていてもできなかった親は、それはそれでストレスを感じています。

この半年、痛感していることは、放射能問題には冷静に対応しつつ、少しでも子どもたちが浴びる放射線量を少なくする努力をすることです。それは、緊急避難的には子どもたちを遠くに連れて行くことも含まれますが、「福島市で安心して生活できるように一刻も早く除染を進めること」「実際、どれだけ放射線被ばくをしているのか、子どもの健康診断を実施すること」を、行政や専門家、そして何より地域住民（もちろん地域で活動している私たち学童保育も含む）が、知恵と力を合わせ、早急な対策を進めていくことだと

思います。

同時に、行政の学童保育に対する位置づけの低さ、認識の薄さは大きな問題です。小学校や保育所などに比べて対応がずさんすぎます。一つだけいと、小学校・保育所の表土改善事業は、市の教育委員会など複数部署が一緒にあって実施されました。しかし学童保育は、担当者は一人が五二か所を受け持って行われています。行政の人的配置の不十分さは、市の学童保育に対する位置づけの低さが根本原因です。なんとかしなければなりません。

福島市学童クラブ連絡協議会は夏休み対策として、室内プールの借用や体育館の開放、学習センターの利用など、学童保育の要望を一定、実現させる成果を上げました。しかし、保護者や子どもたちの願いに十分に答えられたかという点、まだまだこれからだと思う面も多くあります。今後、各学童保育の要望をまとめ、市に要望書を提出す

る予定です。また今後、市内だけでなく、県内の学童保育所のみなさんとの協力も重要になってくると思います。

困難や不安はたくさんあります。私は、保護者のみなさんのさまざま不安にも心を寄せ、一緒に悩みながら、子どもたちと一緒にこれからも歩いていきたいと思っています。福島市内の学童保育所には、震災後全国の仲間からたくさんの方の支援物資をいただきました。子どもたちは新しいおもちゃなどで、楽しく遊んでいます。この場を借りて、全国からの励ましに感謝すると同時に、みなさんの期待に応えてこれからがんばりたいと思っています。

「東日本大震災学童保育義援金」の振込先は下記のとおりです。

- ・銀行コード：0005
- ・店番：351
- ・三菱東京UFJ銀行
- ・本郷支店
- ・普通預金 0012273
- ・名義：全国学童保育連絡協議会

代表 木田保男